
風林火山 武田 清物語 メルヘンの章

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風林火山 武田 清物語 メルヘンの章

【Nコード】

N8158H

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

豪華人物が一人おればそれで絵になる。二人いれば話になる。そんな二人が奏でるすばらしいハーモニー、人生は一度きりこれぐらい爆発しないと生きているとはREADING&READING&

Fun

第1章

第1話 メルヘンだね武田君

私が眼を覚ましたら、そこはメルヘンの世界であった。

なぜ、メルヘンかというと栗が動いていた。それも、1ダースほど。そう、普通栗は、落ちているか、木に実がなっているはずである。栗が動くななんて事はありえない。私は思わず叫んでしまった。

「何だ、ここは。」

その声に反応して、一つの栗がこちらに気づいた。

ゆっくりゆっくりと栗が、私の方へ向かってきた。そして私を囲んだ。

そう、普通の人間なら、ここで気絶やジタバタすると思う。だが私は違う。

なぜなら、そう私はオタクキー武田であるからな。

常日頃において、このような事態の予測していたんだよ。確かに最初は

あり得ないと思ったが、まさにすばらしい。ワンダフルワールドだ。私の妄想は膨らんでいた。栗が動く世界があるなら、アニメの世界もあるに違いない。

そうだ、猫耳少女の世界、ツンデレの世界、コスプレの世界もあるんだ。

私が妄想を膨らましているときに声が聞こえた。

「おい、貴様何者クリ。」

なんと、栗が話しかけてきた。語尾にクリを付けて、さすがメルヘンだと私は感心していた。

「おい、聞こえないのかクリ。」

私は言葉を返した。

「ふっ、私はオタクキー武田だ。またの名を武田 清だ。」

「どこから来たクリか？」

私は、栗に向かって言ってやった。

「その前に自分の名前言いたまえ。」

そう、オタツキー武田は礼儀を大切にする男である。

「せつしゃ、くりくりざえもんでございますクリ。」

私は、思わず侍キターーっと心の中で叫んでいた。だが、言葉には出さなかった。

これ、オタツキーの礼儀ね。

「そうですね。マロンさん。よろしく。」

「いやいや、せつしゃ、くりくりざえもんでございますクリ。」

オタツキー武田は興味のない長い名前は覚えぬ主義なんです。これオタツキーの流儀ね。

「わかりました。ロドリゲスさん。」

「わかってないじゃないクリ。せつしゃの名前はくりくりざえもんクリ。」

この不毛な争いが時間にして、三時間ほど続いて、とうとうくりくりざえもんの方が折れた。

「もう、マロンでも、公爵でもなんでもいいクリ。で貴様はどこから来たクリか？」

「勝ったな。私の勝ちだ。そしてビクトリー。」

オタツキー武田は、負けず嫌いである。これオタツキーの本質ね。

「いや、それはもういいから、さっきの質問に答えるクリ。」

「では、話そう、私はアニメが大好きだ。声優では平等院 夏のファンです。」

「いや、違うクリ。貴様の好みなど聞いていないクリ。どこから来たクリ。」

「それは、オタツキーの秘密だよ。」

私、オタツキー武田は、百万ドルの笑顔で言った。

それを見たくりくりざえもんは何も言わずその場を去ろうとした。

「冗談、冗談ですよ。オタツキージョーク。まって話すから一人に

しないで。」

オタツキー武田は、寂しがり屋のA型である。これオタツキーの特徴ね。

とりあえず、私、オタツキー武田は、事情を話した。目が覚めたら突然この世界に來たことを。

「そうクリか。大変クリね。それじゃあどうにかして元の世界に戻るクリよ。」

そして、クリが去ろうとしたが、私、オタツキー武田は、しがみついて去るのを阻止した。

「ちよつとちよつと、がんばってじゃないでしょう。普通助けるでしょう、こういう場合。協力して

帰る方法を考えるでしょう。マジお願い。この俺の宝物、平等院夏の人形見せてあげるからね。

しかもメイドの制服ですよ。それにこのオタツキーの作り方のレシピも見せよう。」

「見せるだけクリ。別にいらさないクリ。」

その瞬間、私オタツキー武田はくりくりざえもんをぶった。

「このオタツキーの片隅にもおけない奴が。痛いか、俺も痛いんだ。本当に。お前顔堅すぎ。」

「いや、せつしゃ、オタツキーじゃないクリ。」

また私、オタツキー武田は、くりくりざえもんをぶった。

「ばかやろう、私、オタツキー武田と目と目が合った瞬間オタツキーだ。ついでに手と手を合わせ

て幸せだ。わかった。このレシピにも載っているしね。」

「いやクリね。(くりくりざえもんは心の中からこいつに話しかけに言ったことを悔やんだ)」

「シヤラップ。しょうがない。特別に元気になる魔法の言葉を教えよう。」

私は、両手を空に掲げて、言葉を発声した。

「タツキー、タツキー、オタツキー。タツキー、タツキー、オタツキー。」

私、オタツキー武田はこれを30回繰り返した。

「元気になっただろう。勇気がでただろう。オタツキーになれてよかっただろう。」

「・・・いや別にクリ。」

「しょうがない、もう一度やるか。それっ、タツキー・・・」

そのとき、くりくりざえもんは言った。

「もういいクリ、元の世界に帰れる方法をいつしよに探すクリ。」

くりくりざえもんは、しぶしぶ引き受けた。

「よし、それじゃあ、美少女キャラのいる世界にレッツゴー。」

「えっ、自分の世界じゃないの。」

「わくわくするだろ。まだ見ぬ、美少女キャラがいる世界って。」

こうして、二人の奇妙な冒険が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8158h/>

風林火山 武田 清物語 メルヘンの章

2010年10月9日23時50分発行